

2. 宇治の歴史的風致について

2 -1 宇治川の自然美と風雅遊興

宇治川とは淀川の通称であり、滋賀県と京都府の府県境から桂川・木津川との三川合流付近までを指す。

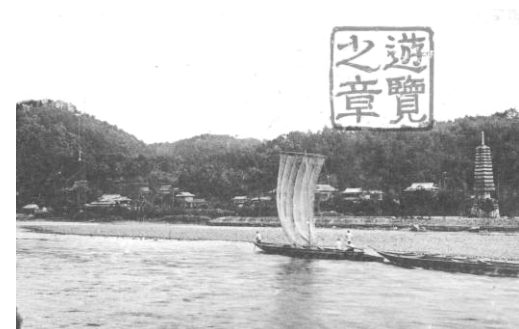
かつての宇治川は市域西部にあった巨椋池に流れ込んでいたが、文禄3年(1594)の太閤堤築堤によって、奈良(大和)街道は宇治を経由せずに伏見城下へと導かれた。

琵琶湖を水源とする宇治川は、山間を縫いつつ峡谷景観を作り出し、宇治に至って谷口部から平野に流れ出す。溪谷を流れる川の険しさを残し、低くも峻険な山丘が平野に移行する、境界的地形変化に富んだ景観が、宇治の自然景観の特性である。

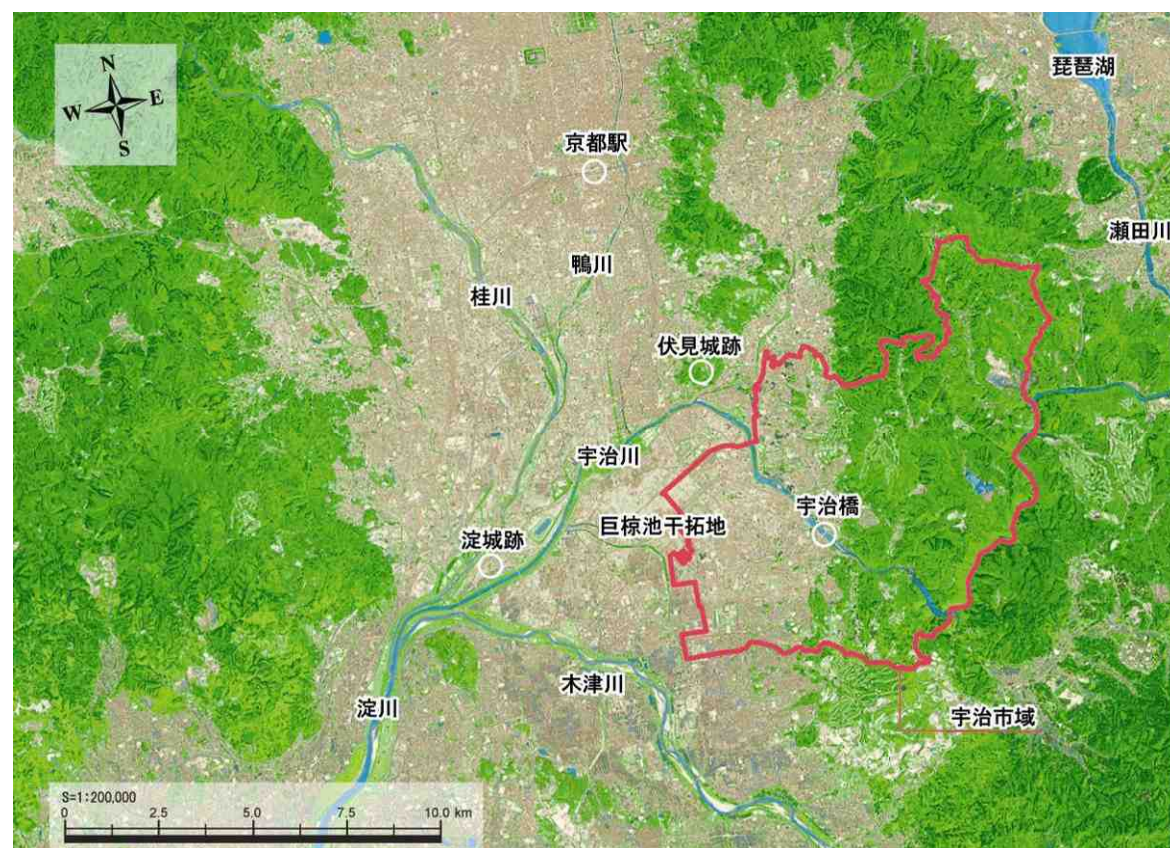
平安貴族達は、宇治川の山紫水明の自然美に着目し、藤原頼道が築いた平等院鳳凰堂、対岸の離宮社(宇治神社・宇治上神社)などの多くの神社仏閣が宗教的雰囲気漂わせている。江戸時代以降に平等院をはじめとする社寺詣が活発になると、宇治川の遊覧が活況を呈し、現在まで受け継がれている。



宇治川の景観



舟運の風景(大正期)



淀川水系(宇治川)および宇治市の位置

○川霧

深い谷間から一挙に平野に流下する宇治川の景観の自然美、とりわけ冬から春にかけての早朝、宇治の谷間を覆うように発生する川霧は、平安時代から宇治を代表する風雅として『勅撰和歌集』や『源氏物語』に取り上げられている。



宇治の川霧

○舟遊び

藤原道長が都から宇治を訪れる時に舟をよく利用したことは記録が伝わる。これは単なる交通手段としてではなく、舟遊びを兼ねたものであった。江戸時代には宇治橋近くの川岸には水運関係とともに旅館が建ち並び、舟遊びを提供していた。現在もこの景観は継承されている。



舟遊び(大正期)



現在の観光船

○鵜飼

『蜻蛉日記』天禄2年(971)条に宇治川の鵜飼が記されており、平安時代に鵜飼が行われていたことがわかる。鎌倉時代まで鵜飼記事は散見されたのち歴史から消えるが、昭和初年に復興されて現在に続いている。



宇治川の鵜飼

○鮎とり

川魚漁は基本的に巨椋池で行われており、宇治川では遊漁的なものが多かったと考えられる。近代以降は「鮎汲み」の姿は見られず、鮎釣が宇治の一風景として絵葉書となっている。

鮎汲み(都名所図会)

宇治川の鮎を網ですくい取り提供する「鮎汲み」が描かれている。



2 -2 社寺仏閣

宇治川周辺は世界遺産の平等院、宇治上神社をはじめ、多くの社寺仏閣が集まる地域である。文化財指定された建造物や庭園、美術工芸品などが多く所在するほか、秀吉の茶事と関連の深い宇治橋、鶴飼いや舟遊びといった歴史・文化的遺産に恵まれたところである。



平等院 (国宝 世界遺産)



宇治上神社本殿（国宝 世界遺産）



橋姫神社



三室戸寺



放生院



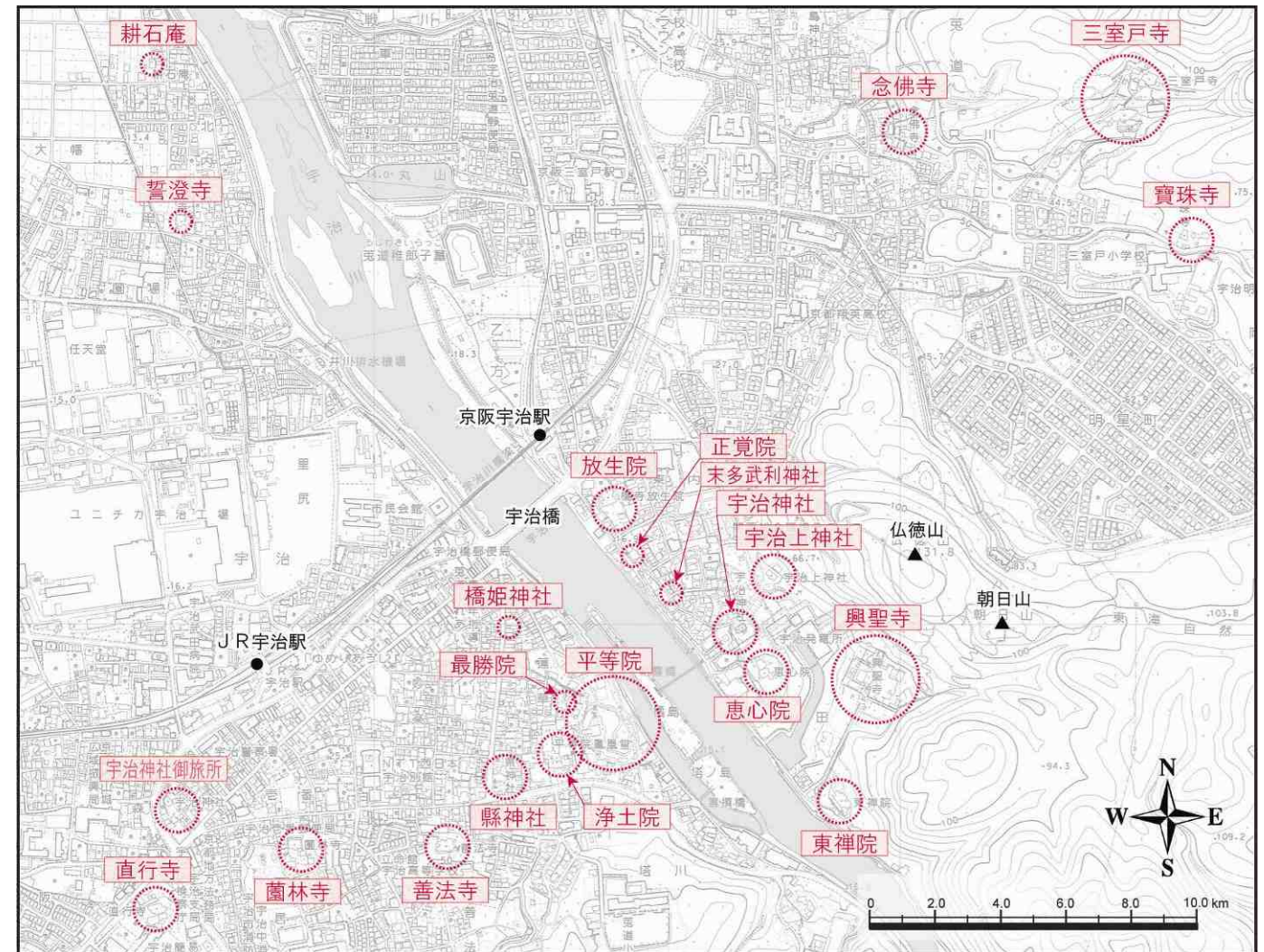
興聖寺・琴坂



宇治神社



縣神社



宇治川周辺の社寺の分布

2 -3 街路形成と伝統的家屋の分布

宇治地区の西岸区域は、平等院背後に古くからの宇治の町が広がる。この区域は中宇治と呼ばれ、主要街路は一見、直角二等辺三角形形状を呈している。直角辺を構成する東西道の本町通と南北道の県通の2本、この二辺を結び斜行する中心街である宇治橋通である。この町の区画は、基本的には本町通を南辺、県通を東辺とし、その中を東西南北の小道で碁盤目状に割られている面的な範囲（宇治街区）と、宇治橋通とそれに直行する短冊型地割が形成される通治いの細長い範囲（宇治橋通街村）とに二分されている。いわば、宇治の歴史過程が町割として重複し、一体化しながら良好に継承されているのである。

この宇治地区一帯に埋蔵される宇治市街遺跡は、宇治の都市形成過程を証明する重要な遺跡である。25 年を超える宇治市街遺跡の発掘調査の蓄積は、この宇治街区の形成が平安後期に遡り、平等院造営以後に盛んに造営された藤原氏一門の別業群に由来することを解きあかし、宇治橋通街村の成立は藤原氏退転後の町屋形成の中で成立したことを解明した。すなわち平安時代における宇治は、宇治川東岸の離宮社を核とするエリア、宇治川西岸の川より平等院エリア、その西に接して別業群（小川殿、小松殿、西殿など）が集中する宇治街区エリアとなり、宇治川を基軸にゾーニングされた広大な別業都市景観を形成していた。

当時、宇治街区の街路は都に倣い「大路」名で呼ばれ、大和大路（現在の県通、本町通）や小河大路、成楽院東大路などの名称が記録に残る。ただし実際の宇治街区は、古代条坊制のような高い規格性を示す方形街区ではなく、少し歪んだものとなっている。これは都城や古代国家施設のような、律令理念に基づく国家計画の古代都市とは違い、藤原氏が造り上げた別業都市の性格反映であり、中世への胎動期における都市形態として注目すべきものである。



宇治市街地で発掘された邸宅庭園遺構

宇治市街地一帯には、宇治の都市形成過程を証明する宇治市街遺跡が存在する。この平安期の邸宅庭園跡は小石敷きの洲浜をあらわした。記録にあるどの邸宅かは不明。



発掘された平安期の街路

現在の伍町通の延長線で発掘された平安時代の街路側溝。中宇治の碁盤目街路が平安に遡ることを証明した。



宇治駅前の発掘で確認された平安から室町時代にかけての柱跡



本町通沿いの中世の町屋発掘遺構



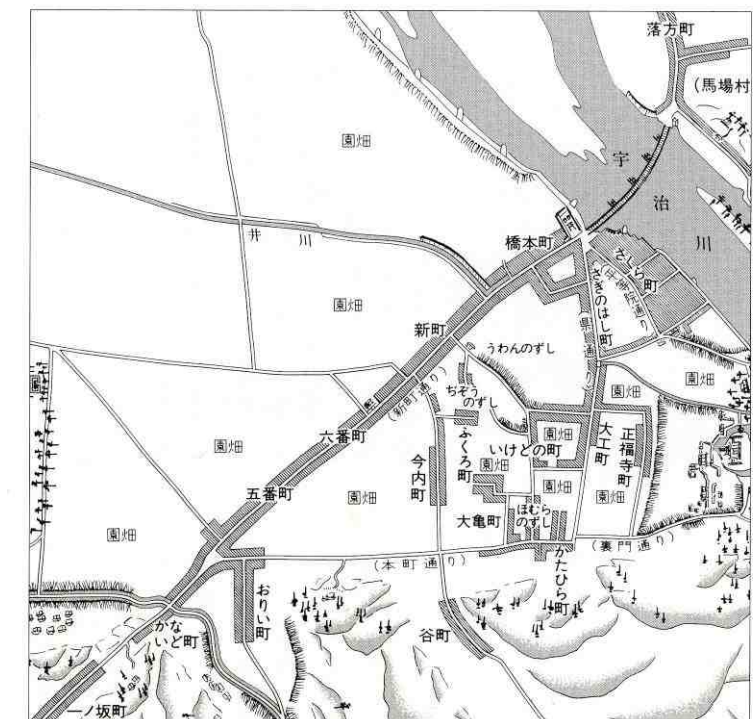
平安時代の社寺と街区・街路

現在の宇治市街地に残る街路のうち、東西南北の碁盤目が平安期に整備されたものである。これらの道は今も京都府道、宇治市道として継承されている。



室町期の宇治地区の街路

新たに施設された宇治橋通と平安以来の碁盤目街区が重複し融合して新たな三角形の街区を形成している。平等院西部にも町屋の進入がある。この街区が現在にほぼそのまま継承されている。



近世前期の宇治の様子

県神社所蔵の絵図から書き起こしたもの。時期的には 17 世紀前半期と考えられる。町場の形成が宇治橋通に集中することが理解できる。また宇治川沿いのさくら町にも舟運等に関係する家屋が密集している。「園畑」は茶畑のことで、町場の中や周囲に広く茶畑が展開しているのがわかる。

中世になると、時代の変革によって宇治から藤原氏が退転し、別業群が廃絶した後に宇治街区の北側に一部重なりつつ宇治橋通が施設され、この通に沿って町屋が形成された。旧来の街路治いにも町屋の形成が進んだものの、宇治橋通が宇治の中心軸となり現代に継承されている。このような街路・街区は、茶業が盛行した江戸期、また日本レイヨン宇治工場が隣接地域で稼動し産業の近代化が促進された昭和初期以降も大きな変化はなかった。

昭和 51 年には、車輛の町中への進入通過を緩和するため、地区に接した北側に都市計画道路の市道宇治橋若森線が施設された。現在はこの都市計画道路沿いに新たな町並を生み出しつつ、歴史的な街区との共生が図られつつある。このように、宇治地区都市景観の骨格構造である街区・街路構成は、歴史的にも特筆できる歴史都市宇治の変遷を跡付けるものである。



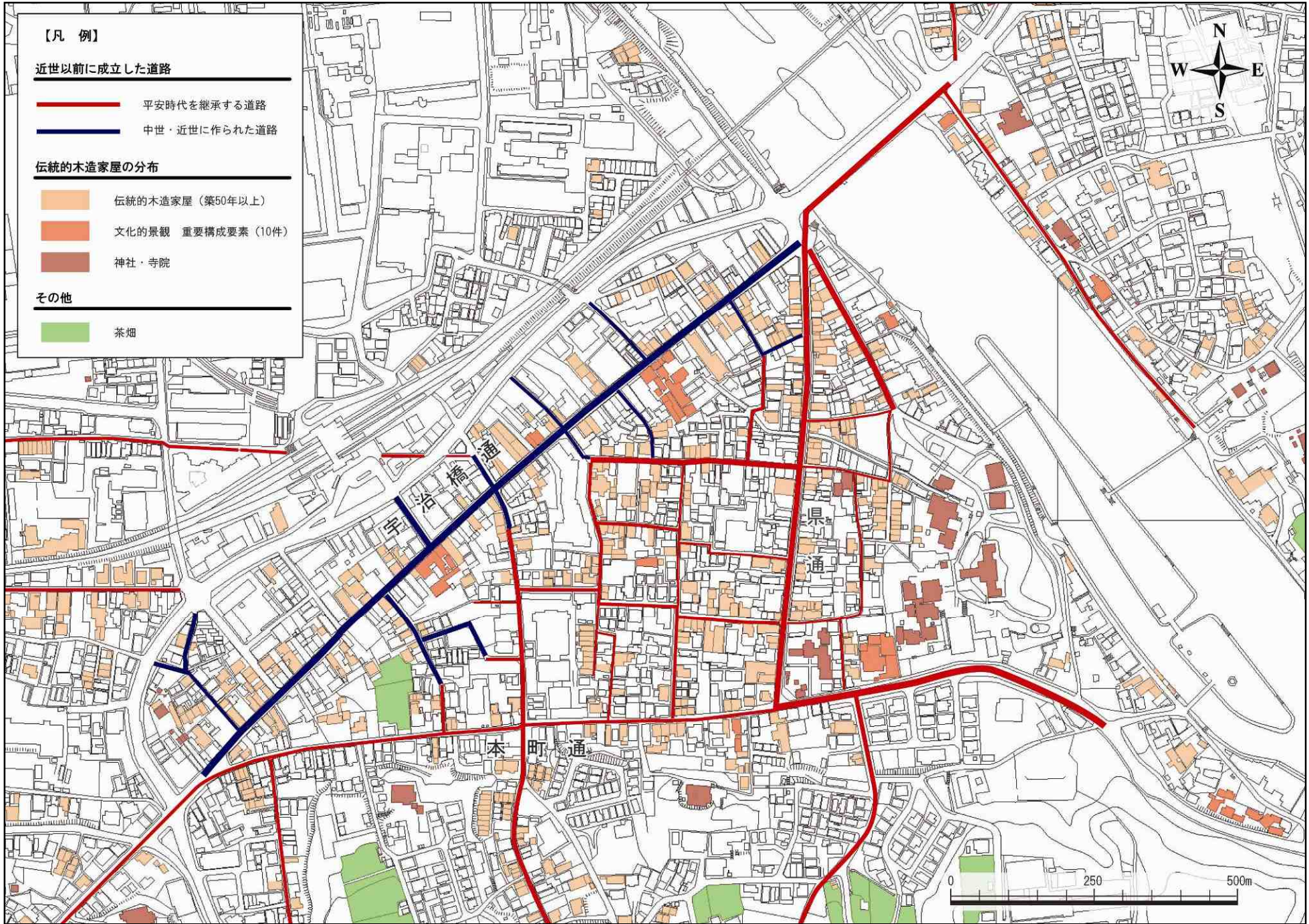
宇治橋通



県通



本町通

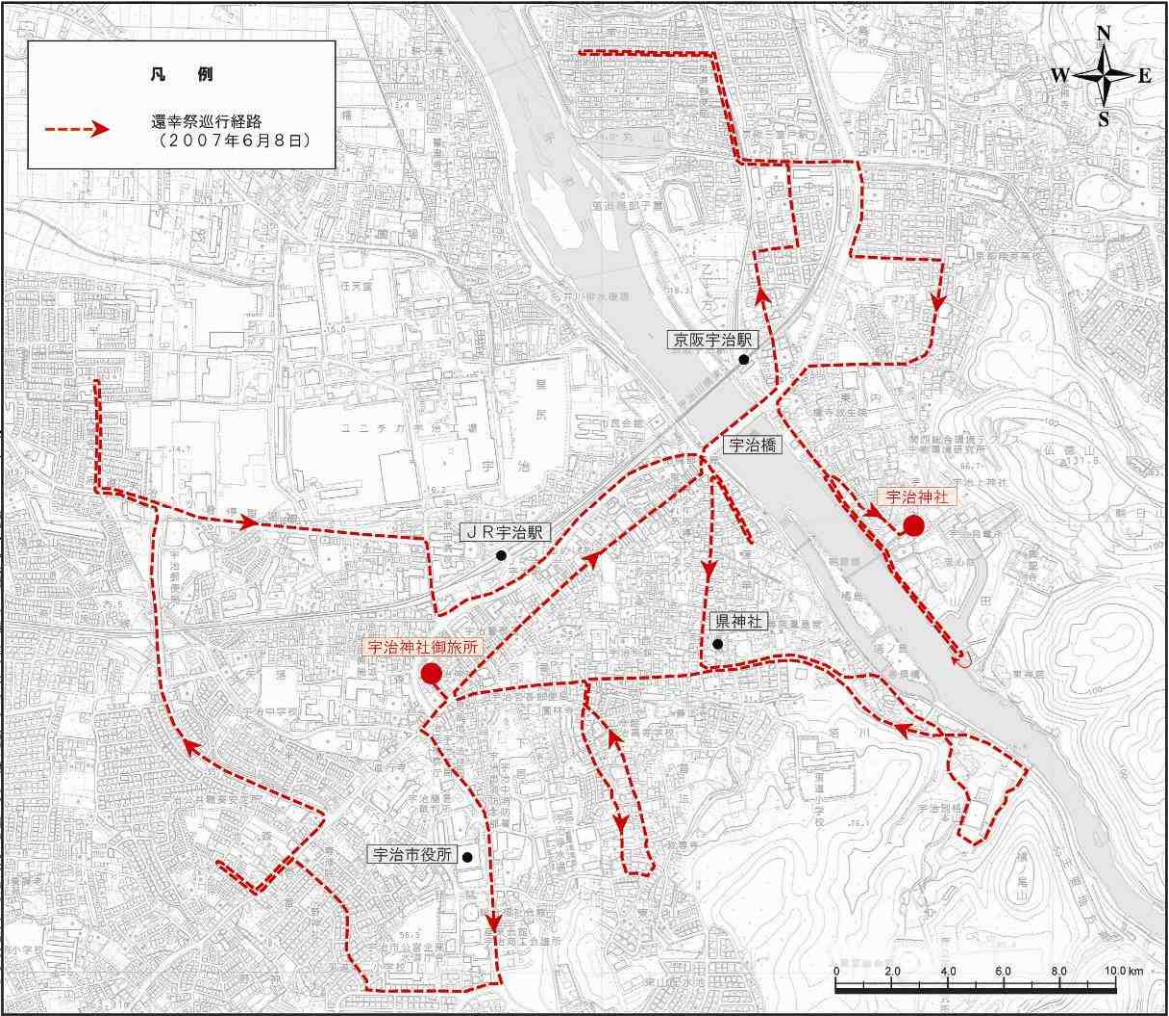


宇治地区に残る歴史的要素（近世以前に成立した道路・伝統的木造家屋・茶畑）

2 -4 宇治地区の祭礼

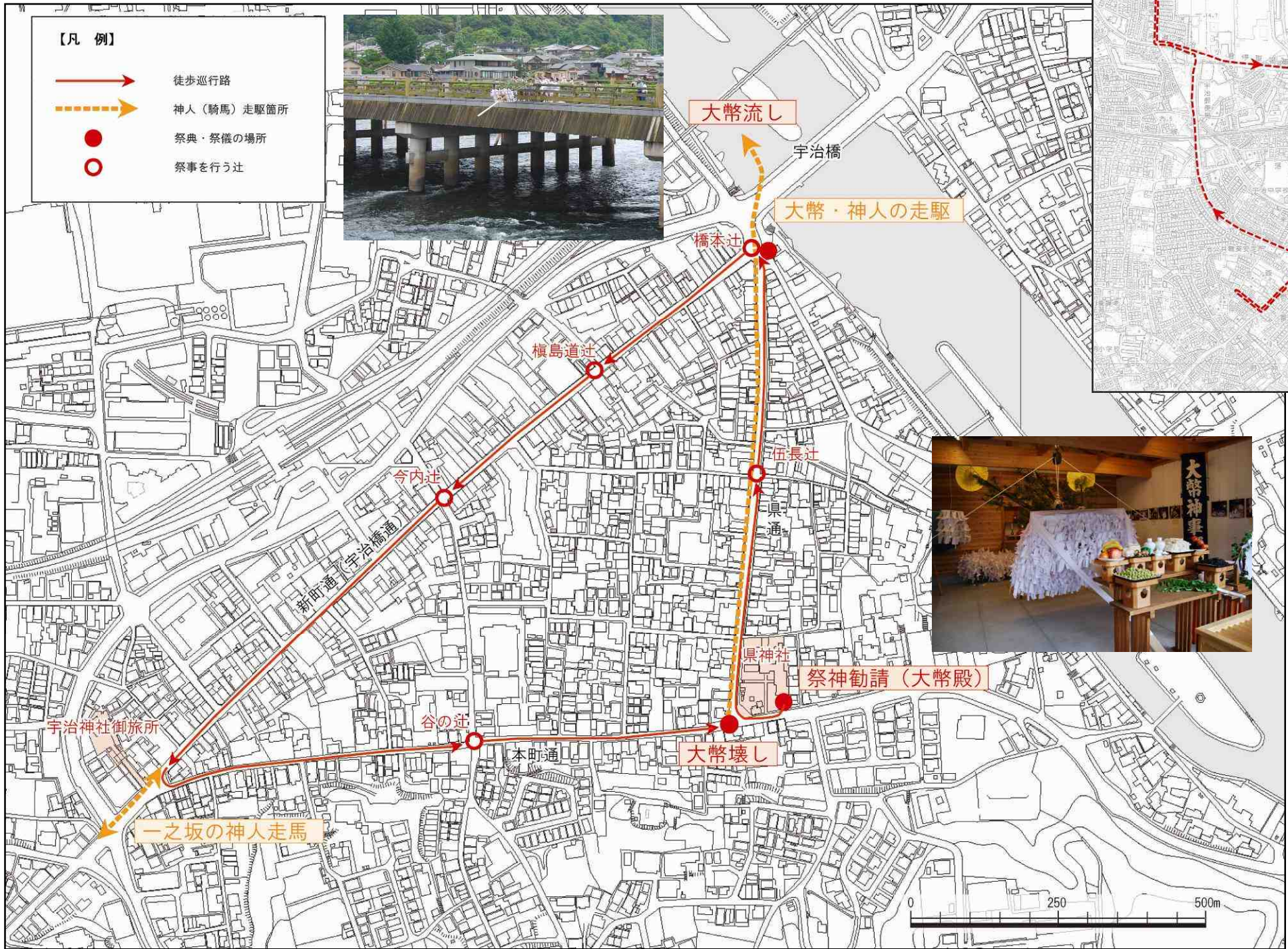
○大幣神事と宇治神社還幸祭（いずれも6月8日に行われる）

大幣神事では、中世の厄除けの神事を伝えるもので、県神社を出発し、中宇治を様々な所作と伴に一周する。最後は、大幣を宇治橋から川に投棄する。



還幸祭巡行ルート（2007年6月8日）

※『わっしょい宇治』（京都文教大学）参照



大幣神事の巡行ルートと祭儀場所（宇治地区）



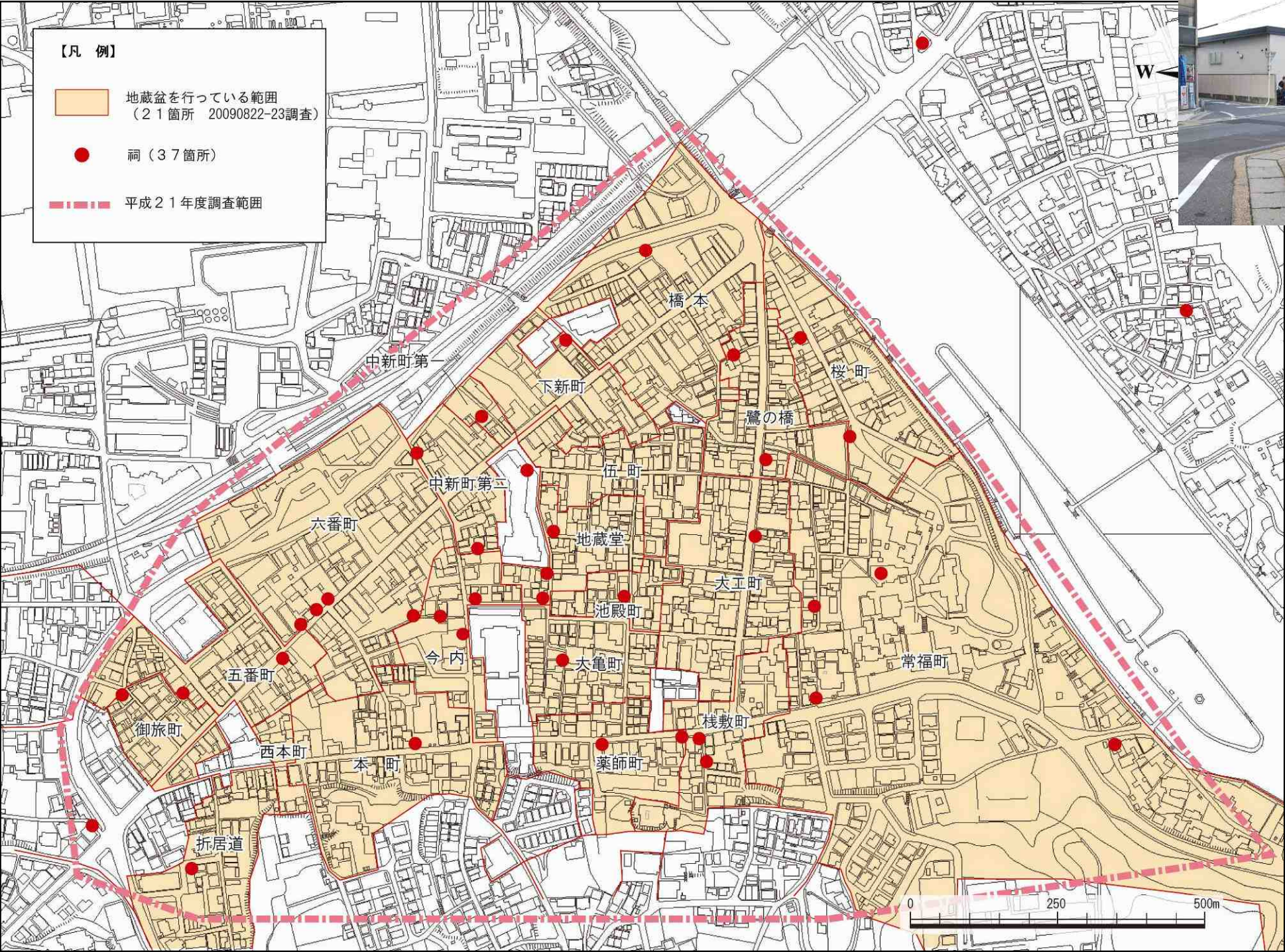
大幣神事 中宇治を様々な所作と伴に一周する。

○地蔵盆と祠

宇治地区において、大幣神事などの祭礼とともに、辻や路傍の石仏前で行われる地蔵盆などの民俗行事は、安定した地域社会を維持してゆくための重要な装置として伝えられてきた。



宇治地区の各所でみられる「お地蔵さん」



地藏祠の位置と地藏盆を行っている町の範囲（宇治地区）



祠の前を会場にした地蔵盆の様子



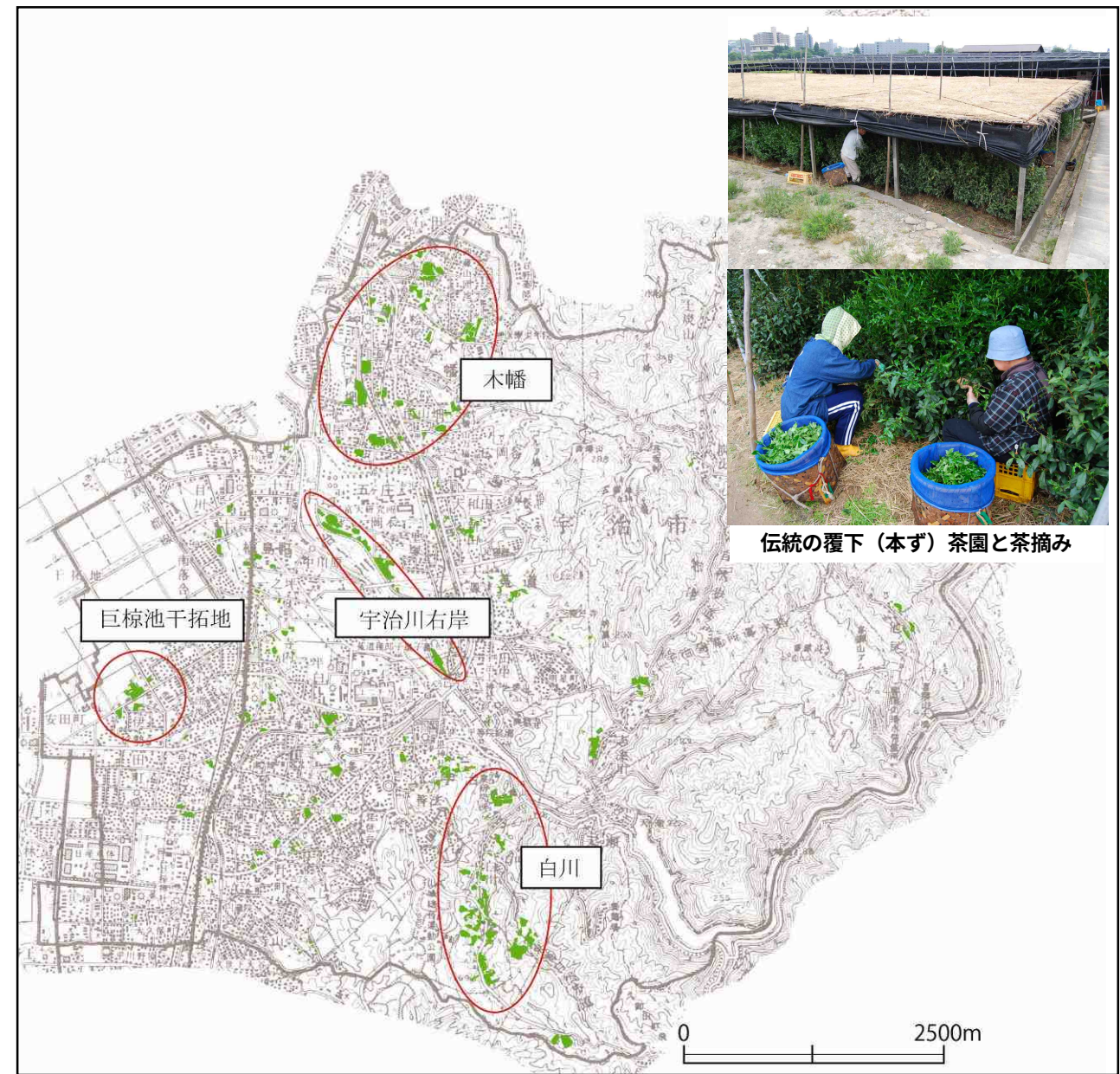
地蔵盆（数珠繰り）の様子

2 -5 宇治茶に関する産業と文化

宇治の特産品としての宇治茶は、全国的に著名である。宇治茶の基本は抹茶となる碾茶であるが、近代以降は玉露などの高級煎茶の生産も行われるようになった。茶の栽培方法としては、全国で一般的にみられる露天園ではなく、茶摘み前にヨシズや遮光シートで茶園全体を覆う覆下園が主体であり、古くから宇治独特の茶園景観を形成している。

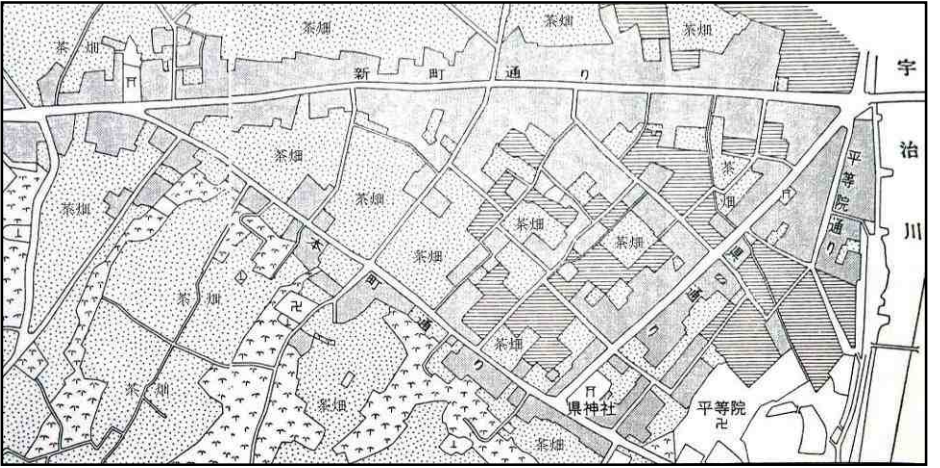
宇治茶生産の特徴は、茶園等の第1次産業から、製茶などの加工に関する第2次産業、流通・販売に係る第3次産業までの産業部門が明確に区別、分業されないことにある。

茶畑は山間や農村域に広く展開するが、近世の絵図を見ると、宇治地区では宇治川沿いと町屋裏の空間地に多くの茶畑が認められ、都市域に茶畑が溶け込んでいたことが理解できる。市街化区域内の茶畑が急速に減少したのは、宇治市が住宅地として着目され開発が進んだ近年のことである。

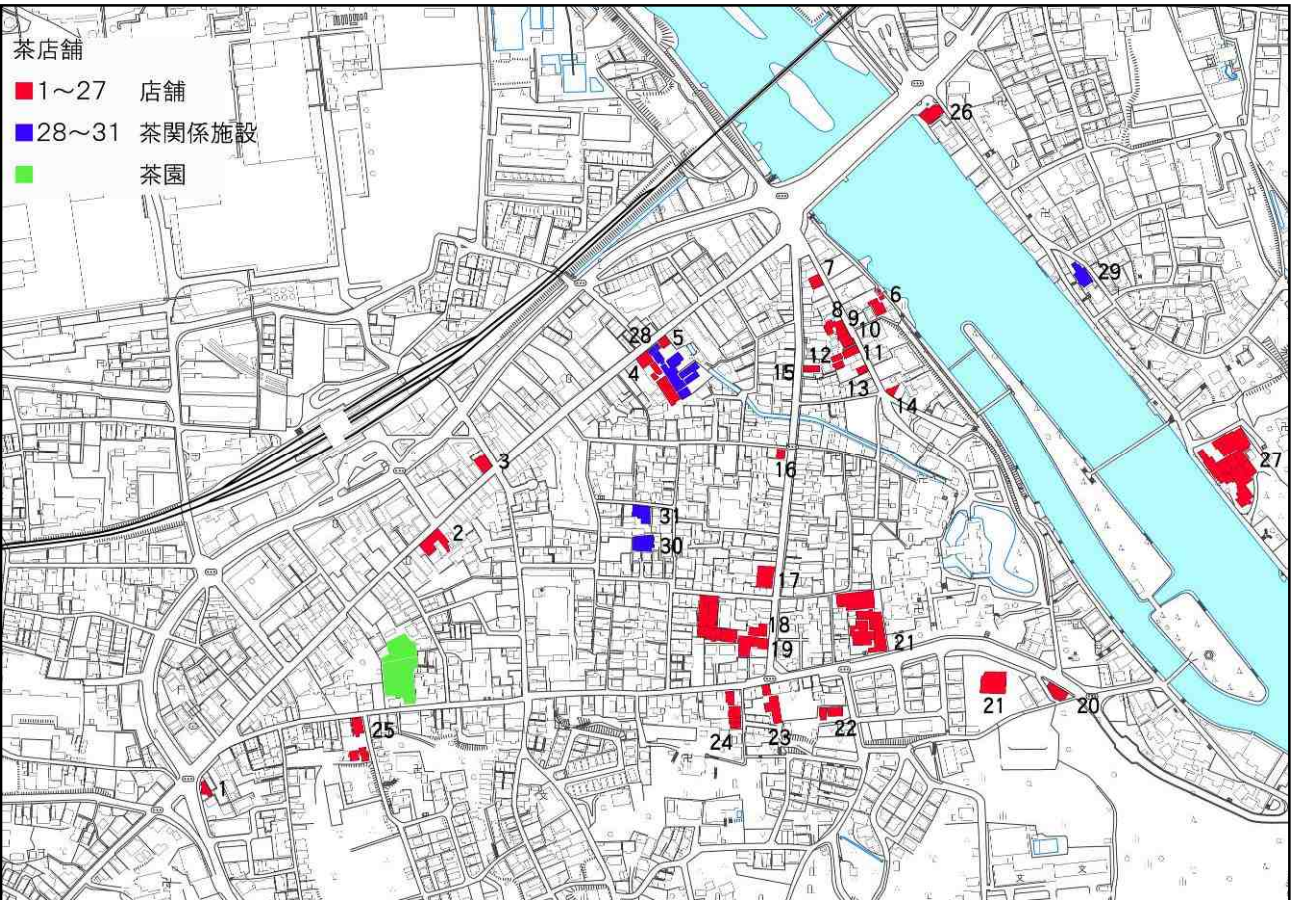


現在の茶園分布

茶生産農家や茶問屋の所在場所は、宇治橋通や県通など、江戸期に活躍した特権的身分の宇治茶師の確認できる場所と概ね重なり合い、茶問屋の中には宇治茶師時代の家屋を継承する家もある。現在、平等院表参道沿いには茶店舗が集中して軒を連ねているが、このような茶に関する町並景観が形成されたのは戦後のことで、修学旅行をはじめ平等院への観光が伸びてゆく中で観光客に向けて新たに形成された宇治茶に関する都市景観である。



明治の茶園分布（宇治地区）



宇治地区の茶関係建物の分布図



宇治地区で稼動する伝統的・家内工業的な製茶工場



現在に唯一伝えられる宇治七名園の一つ「奥山」



七名水の一つ「桐原水」(宇治上神社)



茶商屋敷



お茶に関する小売販売店の集まる平等院表参道

○宇治七名園と七名水

茶生産に直接関わる部分以外でも、宇治地区は茶文化と深くつながりが認められる。

室町時代後半には、総称としての宇治茶のみならず、さらに宇治での茶園名によって品質が評価されるようになる。いわゆる宇治七名園の成立であり、現在、宇治地区の奥山茶園のみが継承されている。

これとともに、地下水の豊かな宇治では、茶の湯に使う七名水も成立し、宇治地区各所の湧水がこれにあてられた。平等院鳳凰堂を囲む阿字池は、山側から湧出する地下水をその水源とするが、この湧出点 2 ヶ所も阿弥陀水と法華水として七名水に選ばれている。現在、七名水のうち往時の水量を伝えるのは、宇治上神社境内の桐原水のみとなっている。



宇治七名園と宇治七名水の位置

○宇治橋の三の間と献茶祭

宇治橋は上流側に三の間と呼ばれる張り出し施設を持つ。この存在が宇治橋の特徴であり、絵画における宇治橋表現の記号となっている。三の間から豊臣秀吉が宇治川の水を汲み上げ茶の湯に使用したという故事が伝えられるなど、お茶との関わりも深い施設である。現在、初夏に行われる献茶祭や秋の宇治茶まつりでは、三の間から宇治川の水を汲み上げ、儀式やお茶をたてるのに使用している。



宇治神社 献茶祭



萬福寺門前(黄檗)に建つ駒蹄影園碑の前で行われる献茶祭



宇治橋三の間で行われる宇治茶まつり